

# 日本経塚信仰の起源と源流を探る

—中国調査中間報告—

菅野成寛\*

## はじめに

経塚信仰とは、施主（願主）の求めにより、僧侶ほか作法にのっとりて写経した經典（如法經）を法会場で供養し、これを納入した経筒および供養具ともども、山腹や丘陵上に埋納する一連の信仰的行為を指す。特に12世紀はその一大画期で、九州から北海道にかけて列島中、広範に無数の経塚が造営され、岩手県下でも藤原氏の平泉・金鶏山経塚をはじめ北上川流域ほか数多く点在する。

この経塚信仰の成立については従来、11世紀代の初期経塚の資料として著名かつ重要な寛弘4年（1007）藤原道長銘の経筒が遺存し（高さ36.4cm、銅製。国宝、写真1）、かれ道長の日記『御堂関白記』同年8月11日条とも合致すること等から、長らく日本起源のものと考えられてきた（この日本起源説は関秀夫『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版・1990年に集約、代表される）。ところがごく最近、經典とともに経塚に埋納された仏像や仏具、鏡や貨幣などといった供養具と、中国の仏舍利塔への納入品とが多く共通することから、日本経塚の起源を、中国大陸に求める主張がなされるようになった（谷口耕生「聖地寧波をめぐる信仰と美術」奈良博編図録『聖地寧波』2009年ほか。既に藪田嘉一郎の先駆的業績、『経塚の起源』綜芸舎・1976年がある）。

確かに他の日本史・資料から窺うと、この大陸成立説は肯ける。たとえば、その道長銘経筒をさらに遡る



写真1 藤原道長銘経筒  
（奈良国立博物館編『聖地寧波』2009年）

\* 中尊寺仏教文化研究所、岩手大学平泉文化研究センター

経塚の初見史料、比叡山延暦寺の学匠、覚超が永延3年(989)に編んだ『修善講式』には、卒塔婆を立てた地中に仏経と仏図と結縁者のリストを埋納して霊験の仏地とした旨が記されている(関秀夫『平安時代の埋経と写経』東京堂出版・1994年所収)。そもそも「卒塔婆」(原義は「塔(ストゥーパ)」)とは、本来的に「仏舍利塔」を意味することから卒塔婆は主に墓地の標識とも見なされ(『日本文徳天皇実録』嘉承3年4月乙丑条、『平安遺文』305号ほか)、その地中に経典を埋納した事例は他に見出せない。明らかに覚超による埋経、発想は、どうも日本由来のものとは考え難いのである。

さらに12世紀初期から中期の、九州北部地域にのみ集中する特異な経筒の問題がある。この経筒は蓋の頂部に塔の相輪をかたどり、円筒を何段にも積み上げて筒本体とした輪積み式の銅製品だが(高さ34cm、銅製。写真2)、その形態は、既往の日本の経筒(たとえば写真1、あるいは蓋が傘形のもの)にはまったく見られぬ新たなタイプのもので、鉛同位体比分析の結果、銅の産地は分析事例のすべてが華南(中国)産(『東京国立博物館紀要』41号・2006年ほか)。しかも蓋に相輪を伴った点でも、後掲の呉越国や、遼・契丹国の相輪を付属させた経筒(写真3、4)の形姿とも相似する。その上、この輪積み式経筒の銘文や台座の裏などには宋人名(陳や李、王ほか)が墨書、あるいは針書きされ(前掲『聖地寧波』)、さらに出土地も日宋貿易の拠点、博多を中心とする九州北部地域に限定されるなど、日本で出土した経筒の一部の来由が中国大陸であることはもはや動かせまい。

だが初期の経筒、寛弘4年の藤原道長銘の筒底には平安京の工人、「伴延助」の名が刻まれ(東博編図録『藤原道長』2007年)、日本製であることは確実である。はたして経塚の起源、成立は列島か大陸か。



写真2 伝宇佐(大分県)出土の輪積み式経筒  
(『聖地寧波』2009年)



写真3 紹興市から出土した銭弘俶塔  
(浙江省博物館編『遠塵離垢』2014年)



写真4 慶州白塔に納入された木製の経筒  
(九州国立博物館編『草原の王朝契丹』2011年)

## 1. 大陸と半島の事例

そこで平泉文化研究センターでは、平泉など県下における経塚遺構の頻出にかんがみ、その起源を探るべく2014年7月、筆者と劉海宇氏による中国調査（浙江省文物考古研究所、浙江省博物館ほか）を実施した。その結果、10、11世紀の中国大陸、なかでもかつての呉越国（現在の上海、杭州、福州ほかの地域）や、遼・契丹国（現在の中国東北部、モンゴル国、内モンゴル自治区ほか）において、高層建築の仏舎利塔下の石室ほかに経典や経文（陀羅尼）などを経筒とともに納入、安置する供養法が存在することを知った。

たとえば呉越国においては、国王の錢弘俶（在位948~78年）が顕徳3年（956）に発願した、8万4千基にもおよぶ錢弘俶塔（阿育王塔とも。高さ約13~43cmで、材質も銅や鉄などまちまち）の場合、内部に空洞を設けて経巻を納入する構造となっており、このことは我が国の『扶桑略記』応和元年（961）11月20日条からも確認される。ちなみにその経巻は『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼経』、いわゆる『宝篋印経』で教主は釈迦、陀羅尼そのものが釈迦の全身の舍利に相当する功德を説くものであった。

その錢弘俶が王妃の孫氏とともに開宝9年（976）に建立した、浙江省杭州市の雷峰塔の天宮と地宮（いわゆる石室）には、この錢弘俶塔（ともに高さ約36cm、純銀製）が納入された事実が2000~2年間の発掘調査で判明するところとなった（浙江省文物考古学研究所編『雷峰塔遺址』2005年）。天宮のその内部には舍利容器が納入され、地宮の錢弘俶塔は残念ながら未開封で納入品が何か判明はしていない（雷峰塔の底層部の『華嚴経』跋文によれば、塔内に「仏螺髻（仏髪）」を安置した旨が知れる）。だが旧呉越国で、現在の浙江省紹興市区物資公司工地から出土した、乾徳3年（965）銘の錢弘俶塔（高さ25.6cm、鉄製。写真3）の内部には同年の刊記を伴う『宝篋印経』が納入され（浙江省博物館編『遠塵離垢』2014年）、この錢弘俶塔が間違いなく経筒であった事実を裏付ける。

では問題の地宮への安置例はどうか。河北省定州市の静志寺塔（858年再建）の地宮へ、977年に納入された965年銘の錢弘俶塔（高さ19.7cm、鉄製）こそ、同965年の刊記を有する『宝篋印経』納入の経筒であったことが前掲『遠塵離垢—唐宋時期の《宝篋印経》—』の記述から知られる。しかもこの地宮の内部には、「釈迦牟尼仏真身舍利」の位牌と釈迦十大弟子とが壁画化され（出光美術館編『地下宮殿の遺宝』1977年）、教主が釈迦の『宝篋印経』とあわせて釈迦信仰を体現したものであったことが判明する。

次に遼・契丹国においても、経巻を納置した経筒が確実に存在した。内モンゴル自治区・赤峰市の慶州白塔は重熙18年（1049）、章聖皇太后（第6代・聖宗皇帝后）が建立した仏舎利塔だが、その天宮内から『宝篋印経』や『法華経』ほか



写真5 朝陽北塔に納入された経筒  
（遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館編『朝陽北塔』2007年）

を納入した円筒形の経筒（高さ約23~45cm、材質は銀および木製。写真4）を多数発見（地宮は未調査）、あわせて塔内には大理石製の釈迦涅槃像が祀られ（九博編図録『草原の王朝契丹』2011年）、ここにおいても釈迦信仰が表明されていた。

遼寧省朝陽市の北塔は同13年（1044）、遼の第7代・興宗によって改修されたものだが、その天宮内には『般若心経』ほかを納入した円筒形の「経塔」、つまり経筒（高さ39cm、塔身は金製。写真5）が納入され、また地宮内には陀羅尼ほかを刻んだ経幢（高さ約5.3m、砂岩製）が屹立して地中における経典安置を実現しており（遼寧省文物考古研究所ほか編『朝陽北塔』2007年）、以上から10、11世紀代の中国大陸において、釈迦信仰に立脚した仏舍利塔下への経典納入は確実といえる。

すなわちこれら大陸の高層構造による仏舍利塔と、列島のきわめて簡易な卒塔婆といった規模と構造上の相違を別にすれば、地中に経典を埋納する日本経塚の理念的な原点こそ、確かに中国の仏舍利塔下の事例ではなかったか。ただし、これを理念的なルートとして措定することは可能としても、現時点において彼我の事例を直接的にリンクさせるのは性急で飛躍があり、今後その日中間の事例を中間的に媒介する具体的な遺構と遺物の発見、そのミッシングリンクの解明が大きな課題となろう。

さらにもう一つ、朝鮮半島の問題がある。いまのところ半島における経塚遺構は未確認だが、高麗国時代の経筒かとおぼしき円筒形の容器が韓国や日本に複数伝来し（高さ約28cm、三重県久居市所在、写真6。三宅敏之『経塚論攷』雄山閣出版・1983年は、これと類似する一つが平壤郊外からの出土品とする）、これが先の遼・契丹国の経筒の形姿と相似する。ちなみに『遼史』や『高麗史』には、11、12世紀の頃、大部の大蔵経が遼国から高麗国へ幾度となくもたらされたことが記録され（『高麗史』文宗17年3月丙午条ほか、『遼史』咸雍8年12月庚寅条）、国界を接した両国の仏教文化交流の一端を垣間見せる。

これを日朝間で見ると、平壤郊外の長寿峯から出土した石製の経箱と、京都・浄土寺経塚遺構から検出された正応2年（1289）銘の石櫃とがよく近似し（経塚への石櫃納入は、既に1130年の福島・松舞金山経塚などの先例がある）、しかも埋納された経典は日朝ともに『法華経』であり（坂詰秀一「埋経の源流をめぐる問題」『古代学論叢』1983年、奈良博編『経塚遺宝』東京美術・1977年）、ここ半島にも大陸と列島とを媒介するミッシングリンクが潜んでいる。

以上から経塚の成立と展開を、日本にのみ限定的に考えてきた既往の研究はもはや意味を失っている。そもそも仏舍利塔の源流、すなわち日本経塚の原点はインドにおける釈迦の入滅に伴う遺骨崇拝（いわゆる仏舍利信仰）に端を発し、やがて広く中央アジア、東アジア、東南アジアの各地域において数多の仏舍利塔が建立されるようになった（新アジア仏教史2・4・5・8・10巻、佼成出版社・2010、2011年ほか）。それゆえ日本においては仏舍利塔から転化した卒塔婆が主として墓地の標識とも見なされたわけで、その地中に経典を埋納するなど日本ではまったく考え及ばぬ発想であった。

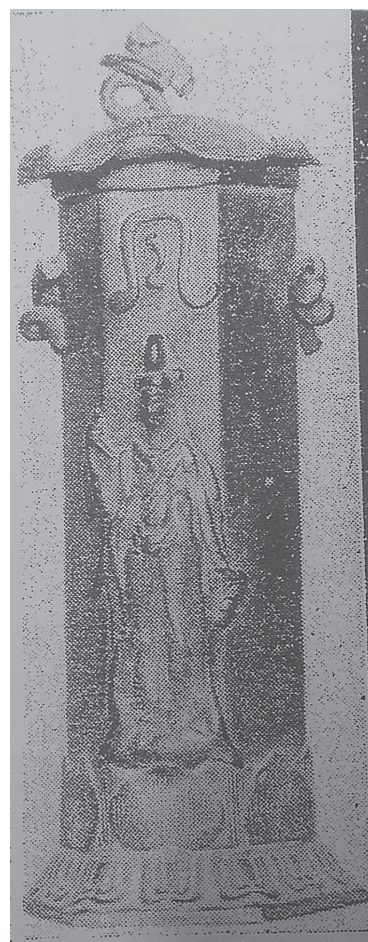


写真6 高麗国時代とおぼしき円筒形の容器（三宅敏之『経塚論攷』1983年）

写真5・6とも、台座・蓮台・経筒・蓋によって構成する点でよく相似する。

これが10、11世紀代の中国大陸において、釈迦の遺骨崇拜（仏舎利信仰）からその釈迦の遺教（経）崇拜（これを法舎利信仰といった）へと転換し、釈迦の遺言である経典を経筒に納め、仏舎利塔下の地宮に安置する供養法が考案されるにいたり、これら動向が列島における経塚信仰の源流と起源を形作った、とするのが筆者の大きな見取り図である。

## 2. 列島の事例

視点を、日本国内に転じよう。実は前述した大陸製の銭弘俣塔が、奈良（吉野）・金峯山と和歌山・那智経塚遺構から出土し（前掲『聖地寧波』）、金峯山への埋納の年次は不明ながら、とりわけ注目される（東博編『那智経塚遺宝』東京美術・1985年は、那智のそれを1130~1年頃の埋経とする）。その金峯山について、10世紀前期の日本史料には漢土からの飛来伝承が記録され（『吏部王記』承平2年2月14日条）、また中期の五代十国時代には大陸にまで金峯山の情報がもたらされていたことが中国側史料から知られる（『釈氏六帖』顕徳5年「日本国」条）。寛弘4年（1007）の藤原道長による埋経は、こうした大陸イメージが揺曳する金峯山になされたもので、埋経供養の講師（指導僧）は延暦寺の覚運ほか（『御堂関白記』同年8月11日条）。道長は、その延暦寺とは祖父の右大臣・師輔の頃から昵懇で（『九曆逸文』天曆8年10月17~20日条ほか）、前掲した『扶桑略記』応和元年（961）11月20日条には、日本僧の日延が銭弘俣塔を初めて我が国にもたらした旨が明記されるが、実はかれ日延も他の史料によれば延暦寺僧（『平安遺文』題跋編1617号）。しかも前述した経塚の初見史料たる『修善講式』の記主、覚超も延暦寺僧で、かれら覚運と覚超は師僧（大僧正良源）を同じくした同門の先達と後進の間柄でもあった（『僧綱補任』）。

さらに注目すべきはその延暦寺の祖山として特別関係の深い、中国・呉越地域の天台山国清寺の近辺からも銭弘俣塔が2点ほど出土したことは暗示的で（高さ13.5cmと21cmの銅製で、埋納年次や埋納状況などは不明。呉越勝覧編輯委員会編『呉越勝覧』2011年）、初めて銭弘俣塔を列島に請来した延暦寺僧・日延の渡航先はまさしくその天台山国清寺であった（『平安遺文』4623号）。おそらく日中の両史料から推すに、日延の背後には、延暦寺と強い絆を有した右大臣師輔の存在と銭弘俣自身の介在が推察されるところであり、道長も長和4年（1015）、天台山大慈寺への施物を渡宋僧に託し、これに先立つ同2年（1013）には、帰国した渡宋僧から天台山図を贈られている（『御堂関白記』長和4年7月15日条、同2年9月14日条）。さらに道長は、その天台山国清寺仏教の教学にも関心を寄せ、早くも長保4年（1002）には、かの覚運から天台大師智顛の代表的な実践的学説、『摩訶止観』の教えすらうけている（『権記』同年正月4日条）。

道長の金峯山への埋経をめぐる環境は、こうした天台山を中心とした海外性に囲繞されていたのであり、銭弘俣塔の請来や初期経塚をめぐる我が国の金峯山と延暦寺と大陸の天台山、そしてこれに師輔と道長、さらには銭弘俣を加えた第三のミッシングリンクを解くうえで、今後の日中における発掘調査が大いに期待されるところである。さらにこれは前述した列島の、九州北部地域に集中した相輪付き輪積みタイプ経筒（銘文ほかに宋人名を有し、銅産地は華南産）の製作地の問題とも密接にリンクし、筆者はそれを大陸で実際に使用された経筒の舶載品とも見ている。

さて、道長に代表される経塚信仰は従来、弥勒信仰や末法思想にのみ直結させて理解されてきたわけだが、このような単調な信仰観は史料上まったくそぐわない。出土した経筒の銘文を集成した関秀夫の偉業、『経塚遺文』（東京堂出版・1985年）を改めて整序、データ化し、分析したところ12世紀の銘文がその大半を占め（11~15世紀代のもののうち約7割が12世紀代の銘文）、これまで唱えられ

てきた11~12世紀代の末法思想の関係史料は、整序した217件の銘文のうち7件のみと意外に少ない（これは既に関自身が指摘したところである）。そしてこれを上回って弥勒（28件）、往生（22件）、追善（20件）の各信仰がほぼ並列的に散見し（なかには重複するものもある）、さらにそれらを上回る祈願を目的とした銘文（32件）も認められた。

だがもっとも注目すべきは、これらの総数をはるかに凌駕する経塚供養の目的をまったく銘記しないもので（施主名と年月日のみ表記）、従来その評価がまったく欠落していたのである。これが経塚造営に伴う作善や結縁を目的として供養されたものであることは明白で、早くも11世紀代の初期経塚の段階から存在し（11~12世紀代の銘文217件のうち121件、約56%を占める）、これを正当に評価してこなかった点に既往の経塚研究の大きな問題があり、同様に上述の祈願を目的とした銘文も評価の対象から長らく外されてきたのである（実はおそらくこれに10倍する無記銘の経塚遺構が列島中に点在すると見られ、その調査と評価も今後の重要課題の一つといえる）。

次に施主・願主の階層を見ると、僧侶が圧倒的多数（217件のうち128件で、約59%）を占めるのは当然のこととして（写経や法会供養は僧侶の介在を絶対的に必要とした）、これに次いで武士をはじめ荘園関係者ほかの在地領主層や国司・在庁層が占め（84件で、約39%）、権門層はことのほか少ない（確かに白河院や鳥羽院、藤原師通や藤原兼実などによる結縁は史料上確認できるが、それはごく希なケースであった）。藤原道長銘の経筒の存在感に引きずられ、これまで権門の介在を過大に評価しがちであったがその実態はまったく異なり、この道長のケースをもって11世紀以降の経塚動静を解析、かつ一般化してはならない。

大多数を占める僧侶の内容を見よう。地方寺院がその受け皿となったケースが圧倒的に多く（寺院名や出土地が判明する134件のうち101件が地方寺院で、約75%を占める）、福岡県から福島県にまで点在し、なかには「金剛仏子」などを冠した密教僧の介在（僧侶128件のうち14件）も見受けられる（ただし天台と真言の何れの密教僧かは判然とししない）。また天台僧あるいは延暦寺僧を名乗った僧侶が12世紀初期以降、長崎県から茨城県下にかけて散見し（同、8件）、これに上記の台密僧も加わって、かれら山門関係者が経塚信仰の流布を担ったことが推し量られる。こうした山門の列島の展開が、11世紀から12世紀初期であったことは既に指摘したところであり（拙稿「平安期の奥羽と列島の仏教」『兵たちの極楽浄土』高志書院・2010年）、それは経塚の初見史料が比叡山の覚超のものであったことから天台仏教の主導は肯ける。

すなわち日本の経塚信仰は、主に12世紀の中世在地社会層を受け皿とし、密教僧を含む天台僧ほかに関与しつつ列島の規模で展開したもので（ごく最近、北海道厚真町の宇隆1遺跡から12世紀第3四半期の常滑窯の壺が発見された）、大半のそれは経塚供養に伴う作善や結縁などを主要な目的とした信仰的営為であり、いわゆる末法思想や弥勒信仰などを中心的な動機としたものではまったくなかったのである。従来、院政期文化といえば浄土教や密教のそれによってのみ語られてきたが、しかしこれはあくまで都市的かつ貴族的、そして限定的なものであり、対して経塚文化は在地的かつ列島のもの、もう一つの顕密仏教の実態を映した、中世初期社会最大の文化的信仰イベントこそ経塚供養であったと再評価されなければならない。

最後にどうしても触れておかねばならぬ問題がある。納入された經典である。『経塚遺文』の銘文から經典名が判明するもの（93件）のうち9割以上を『法華経』が占め（86件）、天台仏教の根本聖典が使われたことが知られる。実はこの『法華経』には、経塚の弥勒信仰や往生信仰と関わる弥勒菩薩や阿弥陀如来が随所に登場し、このうち阿弥陀如来は院政期を代表する抜きん出た信仰対象で、ここに『法華経』の供養が経塚信仰の核ともなったもう一つの時代的背景が認められる。

さらにもう一点、重要な問題がある。『法華経』の教主が「釈迦」であった事実である。その釈迦の入滅に伴う遺骨崇拜、いわゆる仏舎利信仰に日本経塚信仰が源流を發し、やがて10、11世紀代の大陸において釈迦の遺教、すなわち経典が仏舎利塔において崇拜される法舎利信仰に転生したことは前述したが、これが列島においては『法華経』の教主たる釈迦を称揚すべく選択的に受容されたという事実である。ちなみに大陸における仏舎利塔への納入経典は『宝篋印経』や『法華経』、あるいは『般若心経』や陀羅尼ほか多様であったが（前掲『経塚の起源』『雷峰塔遺址』『朝陽北塔』ほか）、これが列島においては天台仏教の『法華経』信仰に特化したわけで（ついでながら半島出土の石製経箱の納入経典も『法華経』であったことは前述した）、アジア社会を広く覆った釈迦信仰の列島のヴァリエーションこそ日本の経塚信仰であった、と理解すべきものだったのである。今後における大陸や半島をも包摂した本格的かつ学際的な調査研究が強く求められ所以であり、それを日本独自のものとのみ評価するのはもはや一国史観的な視野狭窄というほかあるまい。

かくして見晴るかす、広大なアジア社会を普く覆い尽くした釈迦追慕の信仰という大いなる天蓋、その歴史的事象は、たとえばヨーロッパ社会の、キリスト教文化圏におけるイエス信仰（あるいは聖人などの聖遺物崇拜）などと対比させることによってその文明史的立脚点をともに獲得し、さらに両者の独自の個性と普遍性をより一層際立たせることになる。まったく新たな研究課題に向けた、平泉文化研究センターの真価が問われようとしているのである。

\* 本稿は、2014年12月7日に東北大学で開催された〈経塚研究会〉の報告、「アジア社会における舎利（釈迦）信仰の展開と日本経塚の成立」の概要である。